近代熊本とキリスト教（7）

熊本洋学校後の近代学校教育（三）

藤本　誠

四　県立熊本中学校の廃校

九州改進党系の大江義塾が閉鎖されると、紫溟会系の済々黌がますます勢力を拡大した。自由民権運動が低迷するなか紫溟会は政党組織を維持する必要がなくなり、一八八四（明治一七）年三月、学会組織紫溟学会に改組し、一カ月後の県会議員改選で県政界の指導権を掌握した。一八八七（明治二〇）年一〇月、紫溟会は教育機関済々黌を官立学校と同等に昇格させることに成功し[1]、同年一二月の定例県会で、県下唯一の公立中学校であった県立熊本中学校の二一年度予算案を否決した。そのため県立熊本中学校は、一八八八（明治二一）年三月政争の犠牲になって廃校となった。

民権派の『熊本新聞』明治二〇年一二月一四日号の「中学校費否決せらる[2]」では、予算案の否決に対して、次のような糾弾がなされている。

「…教育の大切なることは嘖々（さくさく）として口に絶へざる傍らに、一県下には最早取り換へもなき尋常中学校に要する費目は、何故に否決されたるや。思ふに之れに代るものは別に学科備はりたる私立学校ありて存すとの意に外ならざらん乎。果して此の点のみに出づるあらば、余輩は之れに賛成を表する能はざるなり。蓋し県下の私立学校は元来党派の中に成立ちたるもの多くして、其の整備したる私立学校程党派より成り立ちたるものなり。本来普通教育を目的として起こしたるものは殆んど稀れなり。去れば今日に当り県立の尋常中学校を廃するときは、整備したる私立学校を有せざる党派の人は固より、敢へて党派に入るを好まざる人は将た何れの処に其の子弟の教育を受けしめん乎。若し夫れ目的の一私立学校にして、党派の定論を以つて教授することなく、殊に学校を挙げて、公け即ち地方庁の管理に帰する程の無私なる処置あら

しめば可ならんも、然らざる以上は一般公衆は公立の尋常中学校あるを好望するなるべし。今ま此の尋常中学校費を否決したるは、尤も整備したる私立学校を有せる党派の人の多数を占めたる県会なることは、世人の直ちに感覚する処ろなり。…」

県立熊本中学校は、学制に基づく近代的中学校として一八七六（明治九）年五月、熊本千葉城址に設立され、熊本洋学校を七五年に卒業した**小崎弘道**が教えた。実質的には「熊本洋学校の学科や校則を大半採用して成立したもの」[3]で、熊本洋学校の延長と言えるものであった。西南戦争のため一八七七（明治一〇）年二月廃止されたが、一八七九（明治一二）年九月藪之内の新校舎に移転して再開校した[4]。

1. 小崎弘道（熊本バンド出身の日本組合基督教会重鎮）

「熊本中学校規則」[5]の「総則」には、「中学ヲ分テ初等高等ノ二ト」（第二条）し、「初等中学科卒業ノ者ハ高等中学科ハ勿論師範学科及諸専門学科等ヲ修メ又ハ大学予備門本校ニ入ルコトヲ得」（第三条）、「高等中学科卒業ノ者ハ大学科及高等ノ専門学科等ヲ修ムルコトヲ得」（第四条）としている。文部省は一八八一（明治一四）年七月、「中学校教則大綱」[6]（明治一四年七月二九日文部省達第二八号）を公布して中学校の制度上の性格と教育内容を明確化したが、この「熊本中学校規則」はそれに則っている。「第五条　初等中学科ハ修身、和漢文、英語、算術、代数、幾何、地理、歴史、生理、動物、植物、物理、化学、経済、簿記、習字、図画、唱歌及体操トス」と、「第六条　高等中学科ハ初等中学科ノ修身、和漢文、英語、簿記、図画、唱歌及体操ノ続キニ三角法、金石、本邦法令ヲ加ヘ又更ニ物理、化学ヲ授クルモノトス」は、「中学校教則大綱」をそのまま引き写したものとなっている。県立熊本中学校は、明治期に成立した近代教育制度に則って設立された県下最初の公立中学校であったのである。

しかし『熊本英学史』の花立三郎の論考[7]によると、教科書は全てアメリカから取り寄せ、普通学は全て英語でやったという赤星典太の回顧談や、熊本洋学校出身の**余田司馬人**（よでんしまと）と**福島綱雄**が英語や数学を教えたことから、「当時の熊本中学校は、学校の雰囲気が熊本洋学校のような様相を呈して[7]」おり、「広取学校まではいかないにしても、相当に英学濃厚な県立中学校であったということが[7]」できる。

こうした事情からも、県立熊本中学校は紫溟会にとって鼻持ちならない存在であったのかもしれない。

五　キリスト教主義学校・私立「熊本英学校」

熊本英学校で学び、イギリス・エジンバラ大学医学部を卒業後、キリスト者として計り知れない貢献をした**福田令寿**（よしのぶ）[8]（通称・れいじゅ）氏の回顧談が残っている。明治維新以来近代百年の日本の歩みを知る上でも、維新の開明思想家・横井小楠の学問の系譜を引く最後の一人[8]である福田令寿氏の『百年史の証言[9]』は貴重な記録といえる。

その中で福田氏は、熊本英学校創設の経緯について、次のように回顧している。

「明治十九年に徳富蘇峰の大江義塾が閉鎖され、蘇峰さんが上京してしまうと、熊本には進歩主義の教育をほどこすところは、全くなくなってしまいました。

一方には清清（ママ）鬢があって、盛んにやっているが、進歩派の子弟の学ぶところがない。そこで、必ずしも全く同じ主義主張ではなかったかもしれませんが、一口に言えば進歩主義の人たちということになりましょうか、蘇峰さんに教えを受けた大江義塾の残党たちと、藤崎宮電停前の西南のかどにあった、組合教会の講習所（後の草葉町教会です）にたむろしておった信徒たちとが相談し合い、協力して、英語の塾を開こうということになったわけです。

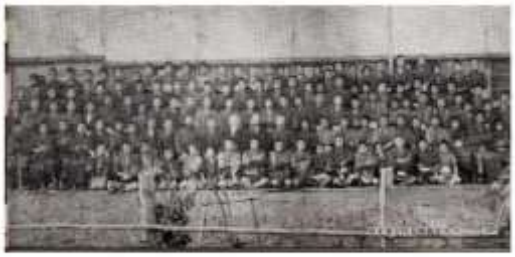
教会の伝道師で、同志社出身の**奥亀太郎**（おく）[10]を引っぱり出して、熊本英学会という名で、私立学校の卵のような学校を始めました。

中心になって世話をしたのは、田浦の井上友次郎、檜前（ひのくま）捨次郎、鹿本の医学生泉田謙太郎、鏡出身の医学生緒方俊彦、それから後に『逆境の恩寵』という長期ベストセ

ラーを書いた徳永規矩などのきわめて有力な信者たちでした。大体村の富豪といった階層の人たちですね。

はっきりと教会の一機関として、キリスト教宣伝に努めるという目的をもって、設立されたわけではありませんが、教会関係の人が主となって始めた塾ですし、生徒も大多数は教会に出入りしておりましたから、自然とキリスト教的な気分があったに違いございません。自らもヤソ学校と

4．熊本英学校新校舎



5．熊本英学校全職員生徒

3．福田令寿（英学校時代：明治22年～23年）

熊本英学校跡

熊本英学校は、明治21年(1888)4月20日、西外坪井町（現坪井3丁目）に設立され、間もなく現在地に移転しました。初代校長は、熊本洋学校から同志社に進んだ海老名弾正（えびなだんじょう）でした。

修業年限は4年間で、英語の授業が半分以上を占め、動植物・物理・化学・地質・天文なども原書で教えていました。

キリスト教主義の学校であったため、同25年に蔵原惟郭（これかた）が校長に就任したとき、同校教諭の歓迎の辞が不穏当であると保守派から激しく攻撃され、それがもとで同29年に廃校となりました。

この学校の教師では徳富蘆花（そか）や内村鑑三（かんぞう）、卒業生では福田令壽（よしのぶ）等が知られています。

熊　本　市

2．熊本英学校跡 プレート

いうことをもって任じ、キリスト教主義の教育をやるということは、最初からいっておったと思います。

やがて、少しは生徒も集まったところで、大江村の竹林の中にある大きな農家を借りて、学校を始めました。」

熊本英語学会は一八八七（明治20）年六月一一日、会長に草葉町教会牧師・奥亀太郎、幹事に徳永規矩、浜田康喜が就任し、開会式を挙行した[12]。この熊本英学会がキリスト教主義の私立学校「熊本英学校」に発展し、翌明治二一年四月二〇日熊本区西外坪井町一〇六番地に設立された[13]。同年夏には、「九品寺の今の熊本市電車庫のところ[14]」に新校舎ができ移転した。九州学院の現・正門を出たすぐ右隣りの場所である。もともと寄宿舎として建て、その一部を教室として使用、翌二二年には二階建ての講堂・教室が建った[14]。

教養の目的に、「正則英語ヲ以テ普通学科ヲ教授シ旁ラ普通和漢文ヲ授ケ後来各専門学科ヲ修習シ得ルノ資格ヲ養成セシム[13]」とあるように、英語を本体として普通教科を副としていた。明治二五年八月の「教科の要領[14]」には、「一　英語科は専ら会話、作文の実力を習得せしむる者とす。／一　修辞、論理、天文、哲学、心理、道義、社会、政治、経済、地理、動物、植物、化学、生理、地質、物理等の各科は、原書又は訳書を用ひて教授し、理化学の如きは多くは実験に由り、以て普通学の完備を期す。／一　数学は算術、代数より、幾何、三角術、解析幾何に至る。／一　歴史科は、日本、支那の二史を邦語にて教授し、英国史及欧米各邦の歴史を英書にて教授す」とある。必要なもののみを日本語で行い、他は原書を用いていたのである。

福田令寿氏によれば、「教科書はまとめて丸善あたりへ注文して、アメリカから取り寄せており[15]」、学科は全部（数学や理科なども）英語の教科書で英語でやるものだから、生徒たちは予習・復習が大変で、「辞書と首っぴきで一日に何百語という単語

6．海老名弾正

をくって、訳をつける」[15]のに苦労した。学科習得の方法は熊本洋学校のスタイルに倣っており、毎日が試験であった。初代校長がジェーンズの愛弟子・**海老名弾正**であるうえ、同志社出身の教師が多かったこともあり、全てアメリカ式であった。

8．徳富健次郎（蘆花）

一八八七（明治二〇）年九月、その海老名弾正が初代校長としてやって来た。東京で伝道していた本郷湯島の講義所（本郷教会の前身）を**横井時雄**（小楠の遺児）に譲り、赴任したのである。英学校の教師の一員となった**徳富健次郎**（蘆花）は、海老名弾正の来熊を『竹崎順子』（大正一二年四月二一日発行、福永書店）で、次のように記している。

「明治二十年九月海老名彈正夫妻の熊本來住は、肥後の耶蘇教復興の烽火（のろし）でありました。十四五年前熊本の洋學校生としてゼエンスから耶蘇を吹き込まれた海老名は、何よりも先づ青年を眼ざしました。徳永規矩等が創（はじ）めた熊本英語學會に魂が入ります。ばらばらに居た有志者の氣が揃ひます。昔の演武場に早速建築が始められ、海老名が來て一年目の明治廿一年九月には、**熊本英語學會**は**熊本英學校**と改名して郊外の新しい校舎に移りました。川田重雄（今、澤村）、濱田康喜、渡瀬常吉、同志社出の村田勤、それから謹慎中の徳富健次郎[16]等が、教授や事務を助け、宣教師も手傳ひます。順子の孫の竹崎八十雄、後に順子の後を承（う）けて熊本女學校を十七年間擔當（たんたう）した**福田令壽**なども其生徒の中にありました。神風連はもう昔の事でしたが、舊學校派と坪井實學の聯合した所謂國權黨は耶蘇教を好みません。其教育機關である濟濟黌は、昔徳富の大江義塾に石を投げたりして迫害を加へましたが、熊本英學校も直ちに睨（にら）まれました。草葉町の教會で説教最中（さなか）に、ソレ敵襲（てきしふ）と聞くなり耶蘇を信ずる健兒（けんじら）等がばらばらと立って街（まち）に跳（をど）り出で應戰（おうせん）したものです。大江義塾の徳富は以前ク

ロガネカヅラの握り太のステツキをもつて歩いて居ましたが、熊本英學校の海老名は石突のはまつた鎗の柄をステツキ代りに打ふつて熊本を歩いて居ました。[17]」

旧学校党と坪井実学党が連合した国権党・紫溟会系の済々黌と、民権派からキリスト教主義へと発展した熊本英学校とが、いかに不倶戴天の敵として熊本の地で対立していたかが如実に物語られている。

海老名弾正は明治二三年九月の『熊本教育月報』21号で熊本英学校の教育法について述べる中で、「世の中には保守だ、改進だ、官権だ、民権だ、国家主義だ、個人主義だ、何だかだと蝶々して、教育社会にまで進入し、教育家も知らず覚へず、時に諂ひ世間に阿りて、人を教育し居ることを忘却すること少なからず[18]」と評したうえで、「抑も本校にては、先づ人を教育し、人を養成すると云ふ精神を第一と致します。……天地の間に生活する人間を教育し養成すると云ふことを主眼とします[18]」と力説している。そしてこの「人間を教育し養成する」柱は、キリスト教主義精神であった。明治二五年八月の「教科の要領[14]」の「修身」には、「…基督教倫理の大則に基き、古今東西聖哲の教訓に拠り、人の徳性を円満に啓発訓育せんことを主旨とし、義に勇み、節を重んじ、公共に尽し、職分に忠なるの精神を鍛錬し、正に自治、自修の気象を奨励力行せしめ、以て独立、謹厳、真摯、忠良等の資性を涵養せんことを期す。教師は毎朝三十分宛徳育上の講演を為し、生徒間に於て毎月二回講習の催しありて切磋磨励を怠らず」とある。

福田令寿氏は、「校風といえるものがあったとすれば、それはやはり剛毅木訥ということでしたろうな。それとやはり、キリスト教主義の教育をやるたてまえであったわけですから、人間形成ということが教育の主眼になっていたのですね[19]」と回想している。しかし授業による具体的な宗教教育は行われなかったようで、次のように述べている。

「キリスト教主義の学校とはいっても、英学校では、いわゆる宗教教育というのはやらなかったのです。聖書の講義もございませんでした。宗教というものは、学科として教えるべき性質のものではない、と考えておったのでしょう。自発的に学ぼうという人を、指導するのは結構だということであ

ったと思いますが、さればといって、クラスをつくり、時間割りを組んで、宗教の講義をするということは、全くございませんでした。ミッション・スクールなどとは、大変こと変わっておったわけです。／しかし、毎朝、授業の始まる前に、三十分間、〝修身〟といって朝礼のようなのをやっておって、その中では、みんな一緒に賛美歌を歌い、聖書を読み、祈祷をささげておりました。みんな一緒といっても、強制するわけではありませんから、ある生徒などは、先生が涙を流して祈祷するのを、冷笑して見ておったことを記憶しております。そういうことを、自分で明記している人もありました。／その祈祷のあとで、校長や教師、あるいは生徒の年長者などが、簡単な所感を述べることになっていましたが、これは必ずしも、キリスト教の話と限定されておったわけではありませんでした。／それから、寄宿舎では毎週一回、修養会というのをやって、各自が感じたことを語り合っておりました。〝感話〟といっておりましたね。[20]」

熊本英学校では学科としての聖書の講義はなかったようだが、毎朝の朝礼や修養会も行われており、キリスト教主義学校として宗教教育の内実を十分に持っていたと言ってよい。そのため、「大多数の生徒たちは、日曜日には必ず教会へ行っており[02]」、「ほとんど九〇パーセントは行っていた[02]」という。「同級生の中には、早くから信仰にはいり、矢もタテもたまらぬ熱心さで、教会へ行く人も[20]」いて、結局、福田を除いた同級生十数人は、みんな同志社の神学部へ進んだという。同級生の中では一番最後ではあったが、福田も明治二四年一月一九日（一八歳）、草葉町教会でO・H・ギュリキ宣教師から洗礼を受けたのである。そして熊本英学校卒業後、明治二六年三月（二〇歳）エジンバラ大学医学部へ進学するためイギリスに渡った。

7．福田令寿（英国留学当時：満19歳）

渡瀬常吉は昭和一三年に『海老名弾正先生』を上梓してい

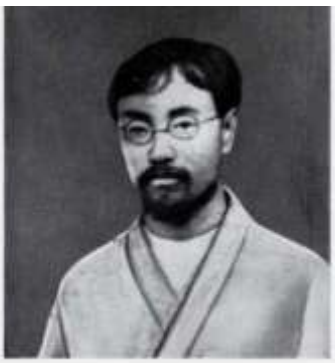
るが、その「二　熊本に於ける先生」[21]の終りに、海老名が築いた熊本英学校の行く末についてこう記している。

「此の如くにして海老名先生の傳道は、教會と男女の學校を左右にし、九州の青年男女を渇仰せしめた。此の時代も永くはなかつたが、併し男學校は、今は**九州學院**が、其の形式上の後繼者となつて育英の業に邁進して居り、女子の方も多少の盛衰はあつたが、今は大江高等女學校となり、竹崎八十雄（注・第七代校長）が校長として教脈を維持し、愈々隆盛に赴きつゝある。（傍点・筆者藤本）」

熊本英学校の幹事であった渡瀬から見ると、熊本英学校址の近隣に創設されて以来発展を続け、優れた人材を輩出していた九州学院は、正に熊本英学校の後を継ぐ男子のキリスト教主義学校として映っていたに違いない。そして二〇一一（平成二二）年、九州学院は創立百周年を迎えた。**竹崎順子**が熊本英学校付属女学校として創立し、海老名や蔵原惟郭、福田令寿などが校長を歴任した**大江高等女学校**は、熊本フェイス学院高等学校として命脈を保っていたが、同年三月その一二三年の歴史に終止符を打つこととなった。

9．竹崎順子

10．当時の熊本女学校



11．柏木義円

一八九〇（明治二三）年一〇月、初代校長・海老名弾正は熊本を去り、京都に出て日本伝道会社（組合教会伝道部の前身）社長となり、全国伝道に従事した。[22]海老名の後任者が決まるまで校長代理を務めたのは**柏木義円**[23]であった。柏木が同志社予備校から着任した明治二三

年一〇月、教育勅語（「教育ニ関スル勅語」[24]）が三〇日に発布され、三一日に文部省は、教育勅語の謄本を全国の学校に頒布して趣旨の徹底に努めるようにと訓令したのであった。

（ふじもと　まこと／九州学院一〇〇周年記念歴史資料・情報センター長）

〔注〕

（1）森田誠一・花立三郎・猪飼隆明『熊本県の百年・県民100年史43』（一九八五年二月二〇日発行、山川出版）「熊本国権党の成立」九九頁。

（2）『新熊本市史　資料編　第六巻　近代Ⅰ』（一九九七年三月三〇日発行、熊本市）八七八～八八二頁。

（3）田中啓介編『熊本英学史』（昭和六〇年九月二五日発行、本邦書籍）花立三郎「第三部・第一章・第二節　県立熊本中学校の英語教育」一七五頁。

（4）『熊本県教育史　中巻』（昭和六年一一月一〇日発行、熊本県教育会）二六五～二六九頁。

（5）『熊本県教育史　上巻』（昭和六年一一月一〇日発行、熊本県教育会）六五五～六五七頁。なお採用されていた教科用図書表が、六五七～六六九頁に掲載されている。

（6）文部科学省ホームページ「学制百年史　資料編」より。

（7）（3）の一八二～一八五頁。

（8）（一八七三（明治六）～一九七三（昭和四八）年）熊本県下益城郡松橋町豊福生まれ。熊本英学校を卒え、草葉町教会でO・H・ギューリキ（O.H.Gulic）師より受洗、組合教会員。イギリス・エジンバラ大学医学部卒。熊本女学校校長、熊本医専教授、五高講師、県医師会会長、県教育委員長、県社会福祉協議会会長、熊本YMCA理事長、県原水禁理事長などを歴任。県近代文化功労者、熊本市名誉市民。氏は九州学院長・遠山参良とともに「紫苑会治療所」（明治四一年七月設立）に献身し、九州学院の創設にも寄与した。また理事としても九州学院の運営に関わり、昭和三八年四月～昭和四〇年三月に理事長を務めた。

「福田の背後に一貫して流れていたのは、熊本英学校

時代に海老名弾正校長によって導かれたキリスト教信仰に基づくヒューマニズム精神だった、といわれる。書を求められると横井小楠がおいの渡米に際し贈った詩の『何ゾ富国ニ止マラン　何ゾ強兵ニ止マラン　大義ヲ四海ニ布カンノミ』を書いた。」（『新熊本史　通史編　第八巻　現代Ⅰ』平成九年三月三〇日発行、熊本市）

（9）熊本日日新聞社編『百年史の証言　福田令寿氏と語る』（一九七一年六月二五日発行、日本ＹＭＣＡ同盟出版部）。これは熊本日日新聞社が「昭和四十三、四年に明治百年企画の一つとして新聞紙上に連載した福田氏の聞き書き」（序）を、日本ＹＭＣＡ同盟出版部が上梓した書。熊本日日新聞に連載されたのは、昭和四三年六月一三日から翌年三月二六日にかけ、二百一一回にわたったが、当時福田氏は九五～六歳であった。

（10）（生年不詳～一九二四年七月）日本組合基督教会伝道師、教員。一八七六（明治九）年一二月新島襄から受洗。八一（明治一四）年同志社普通科英学校本科卒、八四（明治一七）年神学校英学校余科卒。その後、愛媛県小松教会伝道師、今治教会仮牧師、熊本草葉町教会主任伝道師、福岡警固教会牧師など歴任。九二（明治二五）年ハワイに渡り、ホノルル・ヒロ教会で日本人移民に伝道。九九（明治三二）年帰国後は実業界に入り、一九〇二（明治三五）年以降は京都第一商業学校教諭として英語教育に従事。（『日本キリスト教歴史大事典』一九八八年二月二〇日刊行、教文館より）なお、亀太郎は奥太一郎の兄に当る。

奥太一郎は夏目漱石の斡旋で第五高等学校英語科教員となり、小天・日奈久・耶馬溪旅行にも同行し親交があった。その後活水女学校教頭を経て、遠山参良院長の誘いで九州学院に赴任、九州学院教会の会員にもなった。三年後、日本女子大学教授として東京に赴任し日本福音ルーテル東京教会会員となり、一九二八（昭和三）年一〇月五九歳で召天した。

（11）（一八六一～一九〇三年）芦北郡津奈木村の生まれで、徳富蘇峰の従兄。熊本英学校、慶応義塾、アメリカ人

宣教師ジョン・バラの家塾で学び、キリスト教に入信。明治一二年帰郷後、徳富蘇峰と民権運動に身を投じ、大江義塾開校に尽力。民権派の『熊本新聞』の主筆としても活躍。明治二〇年熊本英語学会を興したが、過労のため病臥し、キリスト教文学として当時ベストセラーとなった『逆境の恩寵』を書き残した。（『熊本英学史』前出、二一五～二一六頁。）

（12）『熊本英学史』（前出）・上河一之「第三部　第三章　熊本英学校」二一七頁。

（13）（4）の二九八頁、三二四頁。

（14）（2）の「熊本英学校及び熊本女学校」（明治25・8）八八三～八八七頁。

（15）（9）の三三～四四頁。

（16）筆者・蘆花が自分自身を「謹慎中の徳富健次郎」と慙愧（ざんき）の念を込めて書いているが、これは健次郎の恋愛事件と失踪によって当時謹慎中であったことを指している。

健次郎は明治一五年（一五歳）、兄・猪一郎（蘇峰）が開いた大江義塾に入学後キリスト教信仰に傾き、一八年には一家とともに受洗。従兄弟・横井時雄（小楠の遺児）が牧会をしていた今治教会のある今治町に移った。翌一九年六月（一九歳）同志社に再入学すると、まもなく山本久栄（「茶色の目」）と恋に落ち、二〇年（二〇歳）失恋後、一二月には死を決し同志社を退学、鹿児島へ失踪した。その後二一年二月に鹿児島から連れ戻され謹慎中であったが、海老名弾正の計らいにより熊本英学校で教えていたのである。

中野好夫は『蘆花徳富健次郎』〔第一部〕（昭和四七年三月二五日発行、筑摩書房）で、「だが、遠く南九州、鹿児島の果にまで荒亡流離の旅をつづけていた彼にとって、三たびする故郷熊本での生活は、およそ春には遠い、生ける屍の思いだったに相違ない。幸いに、彼のいわゆる『愛の人』、竹崎順子伯母の温い保護にめぐりあって、郊外高野辺田における竹崎家での生活がはじまることになり、つづいてまもなく、いずれ後でも詳述するが、前年二十年の秋、ふたたび熊本キリス

ト教界を興すために西下していた海老名弾正の許に寄宿することになった。そして皮肉にもこの二月には、『生ける屍』の健次郎が、こともあるに人の子を教えなければならぬ運命になっているのであった」（一七九頁）と記している。

（17）徳富健次郎『竹崎順子』（大正一二年四月二一日発行、福永書店）三三三～三三四頁。（「遠山参良先生蔵書遺本」の初版本からの引用。）

（18）（8）の八八七～八九〇頁。

（19）（9）の四五頁。

（20）（9）の六七頁。

（21）渡瀬常吉『海老名弾正先生』（昭和一三年一二月二五日発行、龍吟社）第十章二、一七八～一八四頁。

（22）同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究・日本プロティスタンティズムノ一源流と展開』（昭和四〇年八月一五日発行、みすず書房）の土肥昭夫「海老名弾正の神学思想―思想史の一精神―」二八一頁。

（23）（一八六〇～一九三八年）新潟県出身。新潟師範学校から東京師範学校卒業後、小学校教師を経て京都同志社英学校で学び、新島襄から精神的影響を受けた。卒業後は同志社予備校主任を経て、一八九〇（明治二三）年一〇月から一年四カ月熊本英学校校長代理を務めた。同志社予備校主任に復帰した後は、『同志社文学』誌上で教育宗教衝突論争に参加し、井上哲次郎所論を厳しく批判。九七（明治三〇）年同志社を去った後は、群馬県安中教会の牧師として、生涯を牧会とキリスト教布教に献身。キリスト教的人間観に基づいて積極的に論陣を張った。（（3）の上河一之「第三部、第三章、第四節　柏木義円の批判精神」二四八～二四九頁より。）

（24）教育勅語は、熊本の時習館出身で大日本帝国憲法起草者、法制局長・井上毅（こわし）が、同じく時習館、肥後実学党出身の枢密顧問官・元田永孚（ながざね）とともに起草した。山住正己『日本教育小史』（一九八七年一月二〇日発行、岩波新書）・「教育勅語の起草」には、その経緯が次のように記されている。

「山県は、文相榎本武揚が徳育にはあまり関心がないとみてとり、九〇年五月、子飼いの内務次官芳川顕正を文相にすえ、その芳川に天皇が勅諭作成を命ずるのである。文相の命により最初の勅語案を作成したのは中村正直であったが、その原案は、忠孝の根源が天にありとするなど、キリスト教的色彩が強かった。中村は個人の完成を何よりも重視し、『敬天敬神』こそ教育の根源と考えていた人であり、もともと勅語原案作成者としては不適任であった。

中村案を批判したのは、法制局長官井上毅である。井上は六月二〇日付山県宛書簡で中村案について、宗教上・哲学上の論争をまき起こすおそれのある語や、政治上の一つの傾向（「臭味」）を示す語、さらに漢学や洋学を思わせるような表現は避けるべきだと批判し、教育に関する勅語の場合、君主が宗教・哲学の教義を述べるわけではなく、また政治上の命令や軍事上の軍令ともちがい、君主の著作とみなすべきであると提言した。彼は勅語作成は困難な事業であり、その難しさは、十二楼台（当時、浅草に十二階建の塔が建築中であった）を建てる難しさ以上であるとみていた。

中村案を批判した井上は、自ら勅語原案を書き下す。それは教学聖旨に見られた儒教主義とは違い、儒教の徳目を若干利用しながらも、日本の教育の根本は、『皇祖皇宗ノ遺訓』にあるとしていた。原案に対し意見を述べ、勅語完成に向けて協力したのは、元田永孚である。彼らの尽力により、教育勅語は完成し、明治天皇の承認を得て、一〇月三〇日に発布されるのだが、その直前一〇月七日に、小学校令が全面的に修正、告示された。」

教育勅語の成立事情については、『新・熊本の歴史6』・近代（上）（昭和五五年八月二八日発行、熊本日日新聞社）の上河一之「熊本と教育勅語」二一二～二二〇頁参照。

元田永孚と井上毅については、（4）の「肥後教育大家略傳」・「1元田永孚」、「2井上毅」二～二〇頁参照。

※挿入写真３～５、７、９～11は、熊本日日新聞社編『百年史の証言　福田令寿氏と語る』（一九七一年六月二五日発行、日本ＹＭＣＡ同盟出版部）より掲載。掲載許可は福田稠氏（福田病院理事長、九州学院理事長）から得たもの。１はWikipediaより、２は筆者撮影、６、８は国立国会図書館：近代日本人の肖像より転用したもの。

Kyushu Gakuin since 1911
Brown Memorial Chapel

九州学院創立 100 周年記念歴史資料・情報センター
ホームページ　QR コード